

BLACK・DRAGON 僕と黒い喰種

ルディア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平凡な高校生『霧薙遊理（ギリナギユウリ）』は実は喰種でその事を周りに隠し日々罪悪感と戦いながら生きていた。ある日、食事を終え帰り道を急いでいると突然現れた謎の黒い人物『黒竜（コクリユウ）』と出会う。黒竜は二人殺しの大罪人で……？完全オリキャラ設定で描かれる新しい喰種の物語。

# 目次

プロローグ	1
第1話 “偶然”	3

## プロローグ

僕の名前は霧雑遊理。ある一つの特徴を除けば何処にでもいそうな唯の高校生だ。そう、僕が、喰種であるという事を除けば。喰種というのは要約すると「人を喰らう怪物」だ。人間の亜種だが、人間の食事は受け付けず人体を摂取しなければ死んでしまう……そんな生き物。確かに不便は多いが、一人暮らしの僕にとっては高校の昼食と友達と外食しに行った時以外はその事を忘れてしまう。後は人を食べる時。人を殺すのには未だに抵抗がある。逆に抵抗が無くなってしまったらどうなるのだろうかと思うととても怖い。それでも「生きる為」と割り切れる様になってしまった自分に嫌悪すら覚える。だから僕はこれからも僕が殺してしまったという罪悪感を抱え生きる事にする。とまあ、カッコいいことを言ったが実際に自覚して生きるなんて難しいだろう。現に今僕は今晚の食事の最中な訳で、こんな事を言える義理ではないのだ。

「ふう……ご馳走様でした。成仏して下さい。」

取り敢えず手を合わせてお辞儀をする。リュックの中からジップロックを取り出し死体を小分けにして詰め込んでいく。喰種は死体一つあれば一ヶ月は裕にもつ。だから無益な殺生を避ける為にこうしてストックしておくのだ。今日は偶々ストックが切れたので通りすがりのサラリーマンを路地裏に追い込んで殺して食ったのだ。味は……まあ普通と言った所か。欲を言うならちよつと油っこかったような気がする。次は薄味を狙おうと密かに決心する。

死体を詰め終わると服の裾を払い立ち上がる。そしてふと、自分の服が血でかなり汚れている事に気がついた。溜息を付きながら予め用意していた服をリュックから取り出すと着替え始める。こんな路地裏だ。誰も来ないだろう。やがて着替え終わると、家を出た時はまだ夕陽が赤く染まっていたのになにの間にいかどりは真つ暗だ。共喰いをする喰種は滅多に居ないが血の匂いに釣られて、はたまた食い場を荒されたとか何とかで他の喰種に襲われる危険性もある。早々に帰り支度を済ませると小走り路地裏を駆け抜けて行く。

不意に頭の上に何か落ちる様な感覚があった。それは次第に間隔を狭めやがて、どしや降りと表現するに相応しい大雨となった。ツいてないなと思いつながら小走りからダッシュへシフトチェンジすると夜の街を駆ける。もう直ぐで路地裏を抜けられる、そう思った次の瞬間目の前に人影が落ちてきた。突然の事で驚き尻餅を着いてしまう。「イタタタタ…」と腰の辺りを擦りながら落ちてきた人影を見る。

黒い服に身を包んだその人物は僕を見るなり僕に

「お前……喰種か？」

と尋ねた。いきなり飛び出してきてそれは些かマナー違反では無いか。相手に名を尋ねる時は自分から名乗るのが礼儀じゃないか。そもそもそんな事答える訳無いだろう。言いたい事は色々あったが取り敢えず立ち上がると黒い人物に向けて口を開こうとした。その直後背中至今迄味わったことの無い強烈な衝撃と痛みが走った。訳も分からず再び地面に突っ伏した僕は薄れる意識の中で上を見上げる。そこには先程の失礼な黒い人物が無表情で僕を睨んでいるだけであった。

## 第1話 “偶然”

どの位意識が無かったのかは定かでは無い。けど、これだけは確かだ。僕は今地面に突っ伏している。しかも背中には未だにとれぬ強烈な痛み。喰種に生まれた事が一番ツいてない事と思っていたが今日の出来事は二番目位にツいてない。身体を起こそうと藻掻くが唯、爪が地面を削るだけだ。だが辛うじて生きている事に一先ず安堵する。喰種じゃ無かつたら今頃三途の川を漂っているだろう。今日だけは喰種であるという事に感謝した。漸く痛みが引いてくると正常に脳が活動を始める。取り敢えず状況を整理しよう。

確か僕は家に帰る帰り道の最中であつた筈だ。それで急いでいたら急に空から人が降ってきて……

「そうだ…… アイツは何処へ行つたんだ……？」

“アイツ”と言うのは僕の記憶にやけに鮮明に焼き付いている黒い人物の事だ。会つて早々「喰種か？」なんて尋ねてきた失礼極まりない奴。一瞬、奴が僕に危害を加えたのか？という考えが頭を過ぎる。だがそれは無いと頭の中で否定した。確かに僕は“背後からの衝撃”によつて意識を失つた。現に引いてきたとはいえ確かに感じる痛みが何よりの証拠だ。奴は僕の真正面に落ちて来たのだから僕の背中にダメージを負わせる事は難しいだろう。

じゃあ誰が？という疑問が頭に浮かぶ。だが、今はそんな事よりも起き上がり帰宅することが何よりの目的だ。力が入らない身体に鞭打つてプルプル震えながらも何とか起き上がる。幸い直前に人肉を喰っていた為再生は早い。今日二回目となる喰種という事への感謝を終えると傍に無造作に転がっていたリュックを拾い上げるとヨタヨタした足取りで、家に向かい歩いて行く。

自宅に着いた僕はリュックを放り投げると真つ直ぐにベッドに向かいその身を投げるとそのまま目を閉じる。安心感からなのか僕は数分でスースーという寢息を立て夢の世界へ落ちて行く。この時僕

はまだ知らなかった。あの「黒い人物」に会ってしまったことが何を意味するのか……。

目が覚めたのはけたましい音を出し小刻みに震える目覚まし時計の所為だ。腕を上下にバンバン振り、止める。見上げると見慣れた天井があった。僕の家は1LDKのマンションだ。アパートでは無くマンションなのは僕の親代わりである叔父に当たる親族からの仕送りが多い為多少高くても充分やっつけていけるというのもある。因みに僕の両親は既に他界している。捜査官に殺されたそうさ。詳しい事は知らないが。何せ当時僕はまだ6歳。理解しようにも出来ない年齢だった。

ホツと一息つき胸をなで下ろすと身体を起こそうとしてみる。筋肉痛に酷似した痛みが背中を中心に広がっていく。今日は学校休もう。そう決心すると薄型で灰色が基調のやけに傷だらけな携帯電話を手に取ると、少し迷った挙句学校に直接、では無く唯一僕が友達というものをやっている『四麻乱須(シマランス)』に電話を掛けることにする。その理由は僕のクラスの担任は良い意味でお節介なのだ。僕は今迄殆ど学校を休んだ事が無い。下手に嘘をつくと僕の家に直接、或いはクラス総出で見舞に来る可能性があるからだ。四麻乱須。名前の由来は父親が槍が好きだから、だそうさ。だったら槍(ソウ)でもいいではないかと思うのは僕だけでは無い筈。本人が気に入っているんで僕は何も言わない事になっているが……。因みに子供が出来た時付ける名前は?と聞いたら速攻で『剣(バスター)』と答えた。キラキラネーム好きは遺伝するようだ。

数回のコールの後今起きましたと言わんばかりな四麻が

「ふわぁー……なんだよお霧薙い。」

と言いなながら電話を受けた。と言うかもう登校時間20分前だぞ?大丈夫か?というツツコミをグツと飲み込むと

「朝早くゴメン。実は僕今日熱出て学校休むから先生に言っといてくれない?」

四)「はあ?自分で言えばいいだろ……………」

「ウチのクラスの担任に言ったらどうなると思う?」

四)「……………」　チツ分かったよ。今度飯奢れよな。」  
「覚えてたらね。」

そんな感じで電話を終えると大きな溜息をつく。余計な予定が一つ増えたが無断欠席の罰に比べれば安いものだ。突然だが此処で僕自身の紹介をしておこうと思う。

名前は……………言わなくても解ると思うが念の為もう一度。『霧薙遊理』。何処にでもいる普通の高校生二年生だ。身長は170後半位(RC値検査に引つ掛かるためあの手この手で計測から逃れている為詳しい事は解らない。)ルックスは……………まあ定評はあるが生まれてこの方彼女というものが出来たことがない。喰種だから深入りされると困ると言う理由を盾に言い訳を続けている。趣味はゲーム全般。ガチ勢では無く色んなゲームを浅く広く試している。親友(笑)の四麻乱須とは中学校からの付き合いだ。唯の腐れ縁だが切っても切れない所がある。とまあこんな所か。(メタい話、キャラ紹介の時にまた詳しく説明するのでここまでにしておこう。)

大分身体が動かせる様になり暇なのでテレビを付け適当にチャンネルを回していた。ふと、気になるニュースに目が止まりリモコンを机の上に置いた。よく見るアナウンサーが特に興味は無いけど仕事だからと言うようなトーンで淡々と原稿を読み上げる。

『11月26日に起きたあの『黒竜事件』からもう直ぐ一年が経とうとしています。行方不明になった方や帰らぬ人となった親族達の悲痛な叫びは届くのでしょうか。当局は、この事件を扱うに当たり喰種対策局20区支部の方にお話を伺いました……………』

画面ではアナウンサーの横に黒竜の写真が映されたところであった。再び意識をテレビに向ける。今度は黒竜の写真が映されていた。

怖いくらいに肌の色が白く、かつ端整に整えられたそれは一目見ただけでは黒竜とは信じられないくらい的美青年だった。次に捜査官と思われる人物に映像が切り替わり如何にも仕事用の表情で事件について述べていた。「黒竜事件」とは一人の喰種が起こした個人の喰種の犯行ではCCG開局以来過去最高の被害者を出した一年前の1月26日に起きた事件である。二ヶ月で二千人余りが亡くなった人類史にいや、喰種史に残るその事件は多くの謎を残したまま主犯である通称「黒竜」が駆逐された事によって幕を閉じた。「謎」と言うのは、僕が知ってる中でも多く存在する。例えば黒竜を「駆逐した」という記録は残っているが肝心の遺体は煙のように消えてしまったとか、11月26日という日付けは確かだがその日に事件が「起きたのか」「終わったのか」はハッキリしていないとか、色々だ。(因みに後者の謎については11月26日に事件が起きたという説が有力である為本記述ではそう記されている。)

「もう一年か……。」

一年も経つのに未だに人々の記憶から消えない事件はそうそう無い。当然だ。二ヶ月で二千人なんて普通なら有り得ない。単純計算でも1日に140人以上は殺している計算になるのだ。そんな喰種居たら間違い無く日本、いや世界最強だろう。それを駆逐したという報告も疑う位だ。実際に遺体は見つかっていないのだから。

「…………… そんな非現実的な事考えたってどうしようもないよな。」  
そう割り切るしか無かった。そんな喰種がまだ生きているなんて考えたくも無い。暫くあれこれ考えていたが不意に睡魔が襲い気づいたら再び夢の中だった。

僕を起こしたのは家に鳴り響くチャイム音だった。慌てて起きるとインターホンに向かう。そこには案の定、予想していた人物つまり四麻乱須が立っていた。手には何か不穏な白い袋を携えていたが気にしない事にした。玄関を開けると「お邪魔します」も言わずに家中にズカズカと入ってくる。僕もそれを咎める事はしない。咎めて

も意味が無いことを知っているからだ。四麻は僕を見るなり

「うわあ……ひでえ顔。もしかしてずっと寝てたのか？」

病人が寝ていて何が悪いんだと心の中で毒づきながら床に座る。テーブルを挟んで向こう側に四麻もドスンと腰を下ろした。そして先程の白い袋をドン！と机に置くと腕を組み何かを言いかけたのでそれを制止するように口を開く。

「何の用？」

四「決まってるんだろ。おめえの見舞いだよ。ほらお前どうせ何も食って無いだろうって思ってたな。『特別に』わざわざ『俺が』買ってきてやったハンバーガーだ。一緒に食おうぜ！」

「生憎、お前と話す気力も飯を食う気力も無いから帰ってくれないか？」

当然このb……ゲフンゲフンこの四麻という男は僕が喰種であると知らない。だから普通に人間の食事を持つてくる。気持ちだけ受け取って……いや、気持ちもハンバーガーも何もかも捨ててそのままご帰宅願うのだがこの四麻という男、性格からして自分と一緒にハンバーガーを食すまで家から出ないだろう。これは詰みというやつか。無言でハンバーガーを袋から取り出すと包み紙を丁寧に必要以上に時間を掛けて剥がす。黄土色のバンズにべっこう色の艶やかなソースが掛かった肉。その上に所狭しと盛られたキャベツ。人間が好き好んで食べる食べ物。それを前にして僕は一つ息を吐いてから覚悟を決めかぶりついた。

四「いやあ、やつぱこの店の照り焼きバーガーはいつ食べても死ぬ程美味いなあ。お前もそう思うだろう？」

「じゃあ今すぐこの場で死ね。」

分かつてはいたが酷い味だ。先ず、この馬鹿が大好きだという照り焼きされた肉だろうか、人肉に近い食感で人肉の数億倍は不味い味が口の中を駆け回った。生臭い溝の様な匂いと泥のような味に吐き気がした。その後は緑と白の野菜。これは、なんと言うか食感がしつかりしている粘土である。しかも油粘土。バンズはまるで人間で言う所の燃えるゴミをゴミ袋ごと食べてるかのようだった。僕は一口だ

け食べると包み紙の上にその物体を置き慌てて水をコップに注ぎ一  
気に煽った。暫く嘔吐感が付き纏うだろう。

「ゴメン…折角きてくれて悪いんだけどどうつしたくないし今日は  
帰ってくれないかな？」

僕が一口食べる間に完食した四麻はコーラを飲みながら僕の方を  
向いた。

四)「……………そっか。分かった。今日は帰る。じゃあ明日学校  
で会おうな。」

自分の食べた分だけのゴミを、持って来た白い袋に入れると颯爽と  
帰って行った。僕は四麻が帰った事を確認するとトイレに駆け込み  
喉の奥に指を突っ込むと先程食べた物を全部吐き出した。

暫くして漸く落ち着くと珈琲を入れ流し込む様に飲んだ。最悪の  
気分だ。冷蔵庫から昨日ストックした人間の手をジップロックから  
取り出すと一息に全部食べてしまった。口直しは出来たがストック  
を失ってしまった事についていつも以上に罪悪感を覚える。唯一の  
親友を無理矢理帰したことなのか、普通に食べるより美味しく感じた  
死体の手についてなのか、それは解らない。はっきりした事は僕は人  
間では無いと再確認したことだけだ。少々鬱になりながら溜息をつ  
くとふと、昨夜起きた事を思い出す。そして僕は数十分後、グレーの  
フード付きパーカーを来て家を出るのであった。

勿論、今僕がいる場所は昨晚起きた奇妙な出来事の舞台となった場  
所だ。来たからと言って特に何もする事は無いが、一応周辺を探索し  
てみることにする。この場所は別に僕の食い場という訳ではなく、僕  
が住んでいる“20区”の組織“あんていく”が管理している食い  
場である。主に、一ヶ月前程に亡くなったSSレートの喰種の食い場  
だったらしい。そこを力の無い喰種に分け与えているというのだ。  
有難い話だが許可とか貰ってるのだろうか？と気になってしまう。

此処では時々別の喰種と出くわす。僕を含め皆基本温厚で力の無い喰種ばかりだ。時には殺した獲物を分け合う事だつてある。現に今日もこの場所には一人の喰種が死体を貪っていた所だ。僕はそつと近づくと

「リーさん、今晚は。」

と話し掛けた。リーさんと呼ばれた人物は驚いた様に顔を上げたが相手が僕だと分かると急に警戒心を解き黙って一部を僕に差し出して来た。

「僕は大丈夫ですよ。昨日食べたので。」

そう言うのとリーさんは黙って手を引つ込める。リーさんは中国生まれの喰種でこちらの言葉は分かるが話すことは出来ないらしいと、  
“あんていく”の店長に聞いたことがある。あまり会う機会はないが会う度に死体を分けてくれる温厚な方の喰種だ。「そう言えば」とリーさんに話し掛けようとした直後リーさんの首から上は綺麗に血飛沫と脳漿を撒き散らし消えた。突然の出来事でポカンとしていると背後から蹴られたような衝撃が走った。何とか受け身を取り衝撃を受けた方向を見るとそこには茶髪で如何にもガラが悪そうな眼鏡を掛けた男が立っていた。

「誰……ですか？」

恐る恐る聞くとその男は面倒くさそうに答えた。

「あー俺？俺は西尾錦って言っただけど、てめえら俺の食い場で何してくれちゃってんだ？」

「俺の… 食い場…？ 確か此処はあんていくが管理してた筈じゃ… カハッ!？」

突然腹部に回し蹴りを入れられる。二、三步後ろによりめくと呻き声を上げながら「どうして……。」と呟く。全く昨日から本当にツイてない。飛んでいく思考を掻き集めるように脳を働かせる。だが、何も出てこない。何も答えにならない。西尾と名乗った男はイラついた口調で僕の疑問に答えてくれた。

「本来ならな、ここら一帯は俺の食い場だったんだぞ？それなのに、大食い”の野郎が我が物顔で占拠しやがって死んだら今度はあんて

いくが管理する？ふぎけんじゃねえ。」

確かに理屈は通る。だが、僕は禁句であるだろうある事に気づいてしまうのだ。そう単純だがこの人が一切触れないように嘘をついている事に。

「グッ……… 食い場を奪われたのは……… 貴方が弱いからでしょう………？」

一瞬、時間が止まった。次の瞬間怒りを露わにした西尾が全力の蹴りを僕に向けて放った。ビュンツ！という風切り音と共に凄まじい速さで迫ってくる脚を両手をクロスして何とか堪えるが数メートル程宙を舞った。昨日以上の衝撃に肺の中の空気が全部出てしまったようであった。地面に倒れる事は避けたが立つのがやっとの状態だ。「あーかつたりい。雑魚のくせにいきがりやがって。早く死ねよっ！」

二発目が来る。もう受けられない。死を覚悟した僕にその脚が届く事は無かった。それは僕と西尾との間に一人の人物が立っていたからだ。正確には西尾の脚を受け止めていた。片手で。

「まあまあ西尾君。此処は僕に免じて勘弁してやってくれないかな？」

「ちいつ……… またお前らか……… あんていく!!」

その人物は前に行った時にあんていくの店員が着ていた制服を来た恰幅の良い変わった髪型の男性だった。

「それとも……… この『魔猿』とやり合ってみるかい？」

「クソっ……… あの羽赫の糞野郎といい……… 次は殺す……… ぶっ殺す………！」

不穏な捨て台詞と共に建物の奥へと消えて行く。僕はそんな西尾から目を離すと改めて乱入者に視線を向けた。そして礼を述べるため口を開く。

「あの……… 助けて頂いて有難う御座いました。古間円児さん……… ですよね？」

古「覚えてくれてたなんて光荣だね。君は一度店に来た事があるよね？」

「はい…………。霧薙遊理と言います。」

古)「遊理君か…………。君さえ良ければ今からうちの店に来ないかい?」

「いいんですか…………? 確かもう営業時間は終わっているような…………。」

古)「勿論、全然大丈夫だよ。」

「じゃあ………… お言葉に甘えて…………。」

カランカランという小気味よい音を立てて扉を開け店内に入る。既に営業時間は終了している為客は居ないと思っていたが、何と僕以外に既にカウンター席に座り珈琲を飲んでいる人が居た。この人も喰種なのだろうか。そんな事を考えながらカウンター席に向かう。「お客様一名ご案内します。」

古間さんがそんな事を言っただけでカウンターの奥へ入り何も言わずに珈琲を引き始めてくれた。珈琲を淹れてもらってる間僕は我慢出来ずに隣の大学生らしき人物に話し掛けた。

「あの…………。貴方も喰種なんですか?」

「えっ…………。まあ…………。半喰種って言った方が正しいのかな?」

「?半喰種?」

弱々しく微笑む人物…………『金木研』は自分にも良く分からないといった感じで珈琲を啜った。話を聞くと信じられない事だが、喰種の臓器である「赫包」を移植され喰種になったとか。その為半分喰種半分人間という奇妙な生物になってしまったという。「赫眼」も片目だけらしい。

「そうなんですか…………。信じられません。事実なのでしようし…………。」

金)「最初は色々戸惑ったし正直今も喰種か人間かも解らないままだよ。所で霧薙君…………?はどうして此処に?」

「実は…………。」

僕はこれまでの経緯をざっくり纏めて話した。西尾さんに襲われたと話すと苦笑しながら「僕もさつき襲われたよ。トーカさんが来て

くれなきや死んでた。」と言った。話を聞く限り、西尾さんは食い場を荒しているように見えた金木研を殺そうとした所トーカーさんと呼ばれていた人物に軽くボコられ頭にきて食い場を飛び回っていたら偶々僕達を見つけ襲って来たという事のようにだ。

「はあ…… お互い災難ですね……。」

金) 「そうだね……。」

その後も暫く金木さんと話した後遅い時間なので家に帰ることにした。店長さんや古間さんは泊まっていきなよと言ってくれたが、家は近いので断って店を後にした。因みに珈琲の代金は店長さんがサービスしてくれた。財布を持っていなかったので助かりますとお礼も忘れずに。そんなこんなで帰り道を急いでいると、不意に強烈な既視感に襲われた。まるで何かの前兆の様な……。そんな考えを掻き消す様に走り出す。すると、申し合わせた様に頭上から人影が落ちてきた。今度は尻餅を着かない。何故ならその人物を僕は探していたからだ。

「お前は…… あの時の……。」

「…… 生憎貴様と喋っている余裕は無い。退け。」

そう、あの時の黒い人物だ。一歩踏み出すとその黒い人物は舌打ちしながら突進してきた。咄嗟に横に転がり躲す。意味が分からない何故攻撃してきたのか。

「僕はただ貴方に話が……。」

「知らん。そこを退けと言っているんだ。聞こえなかったのか？」

話とは一体なんなのか。それは、「黒竜」についてだった。一年前。路地裏で一度だけ僕は「黒竜」を目視している。全身黒づくめの格好に黒いマント。そう、この黒い人物「黒竜」に酷似しているのだ。口を開こうとするがその前に黒い人物の拳が飛んでくる。西尾の蹴りなんて目じゃないくらいのスピードだ。顔面を庇うように腕で顔を覆うが、それごと吹き飛ばされた。遙か後方に吹き飛ばされ頭から地面に墜落した僕は薄れゆく景色の中、はっきりと黒い人物の顔が見えた。そして目を見開く。その顔は今朝ニュースで見た黒竜の顔そのものだったのだから……。